

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 1200年前後のドナウ河流域における文学事情： パッサウ司教区を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): パッサウ, ウィーン, ドナウ河, 『ニーベルンゲンの歌』, ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ キーワード (En): 作成者: 松村, 國隆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006212">https://doi.org/10.18956/00006212</a>

## 1200年前後のドナウ河流域における文学事情

——パッサウ司教区を中心に——

松 村 國 隆

### 要 旨

ドイツ語文化圏では1200年前後、つまり1190年から1210年までの20年間は、文学史上まれに見る豊穡な時期であった。これは、18世紀から19世紀にかけてゲーテ、シラーを中心としたドイツ文学の隆盛期に匹敵する。ちょうどその頃に、ドナウ河流域では英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』が誕生し、恋愛歌謡「ミンネザング」のすぐれた歌人たちが輩出している。この文学現象を語る場合、パッサウ司教の宮廷とバーベンベルク家のウィーン宮廷の存在を無視することはできない。しかしながら、その実態については必ずしも十分に解明されているわけではない。本論文では、『ニーベルンゲンの歌』および歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ等の歌謡テキストの解説を通じて、また歌人たちと彼らのパトロンであったパッサウ司教やバーベンベルク家のオーストリア公との関係を通じて、当時のドナウ河流域における文学事情を明らかにしたい。

キーワード：パッサウ、ウィーン、ドナウ河、『ニーベルンゲンの歌』、

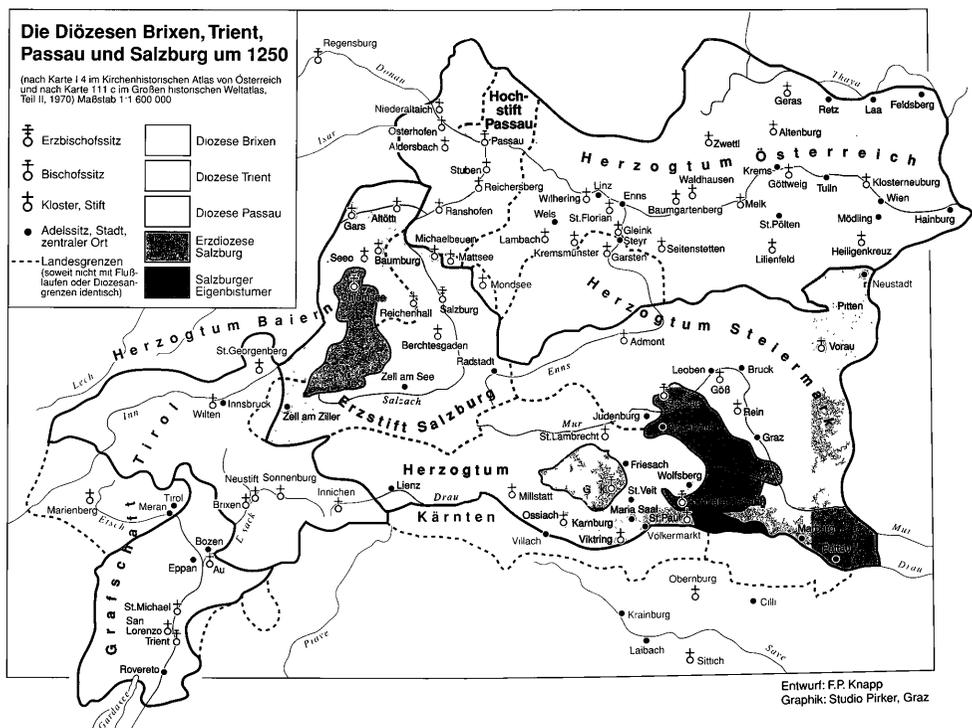
ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ

### 1 はじめに

永らく待ち望まれていた『オーストリア文学史』（全7巻）の第1巻が刊行されたのは1994年<sup>1)</sup>、それからすでに10数年が経過しているが、完結までになおしばらくの歳月を要するであろう。第1巻の著者フリッツ・ペーター・クナップはウィーン大学の出身で、同大学で古代・中世部門の研究者として出発し、新たに誕生したパッサウ大学に迎えられ、さらにキール大学で教鞭をとったあと、現在はハイデルベルク大学中世部門の正教授として活躍しているドイツ中世文学研究の第一人者である。彼の基本姿勢は一貫して、従来のオーストリア文学史を批判的に継承することによってその再構築を目指すとともに、中世文学ではとくに欠かすことのできない聴衆の介在を重要視することであった。<sup>2)</sup> この基本姿勢は、今回の文学史記述についても当て嵌まる。まず注目すべきは、本書の表題にパッサウ、ザルツブルク、ブリクセン、トリ

エントの各司教区が登場していることであろう。そして最初と最後の見開き頁には、10世紀と1250年頃の各司教区、司教座、所領、修道院の所在地を示した地図が掲げられている。さらに注目すべきは、目次が明示する本書の構成である。第1章「基盤と前史、ドイツ南東部の入植と教化の時代における文芸の最初の痕跡」、第2章「叙任権闘争の勃発から稀少特権までの時代の文学」(1075-1156)とあり、政治的な事件と絡めつつ文学の史的展開をたどっている点では、とくに新たな試みであるとは言えない。ところが、第3章「パーベンペルク家の諸公と大空位時代の文学」(1156-1273)ではAとBの2部からなっており、しかもそのいずれにおいても、前半は「ラテン語で記された文学」、後半は「ドイツ語で記された文学」を扱っている。Aが「司教区パッサウの文学」であるのに対して、Bは「司教区ザルツブルク、ブリクセン、トリエントの文学」となっているように、4つの司教区のうちパッサウだけが独立して扱われており、その他の3司教区は一括して論じられている。こうした文学史記述から明らかなのは、パッサウ司教区が中世オーストリア文学史に占める位置の大きさであろう。<sup>3)</sup>

ここで、上述の1250年頃の4司教区(ザルツブルク、ブリクセン、トリエント、パッサウ)と司教座、所領、修道院の所在地を示した地図を紹介しておこう。<sup>4)</sup> 地図を見るかぎり、とくにパッサウからウィーンにかけてのドナウ河流域に、今日なお健在のクレムスマンスター



(Kremsmünster) やメルク (Melk) といった修道院が数多く誕生していて、ヨーロッパ中世が急速にキリスト教によって一元化されていく様子が窺える。バーベンベルク家はすでに絶えていたとはいえ、その間にドナウ河流域の歴史的状況はさして大きく変貌しているとは考えられない。いずれにせよ、パッサウ司教区はパッサウ司教の直轄領とオーストリア公国、それにシュタイアーマルク公国とバイエルン公国の一部から成る広大な地域であった。われわれはまたこの地図から、その西端にパッサウ司教がこの司教区の頭として君臨し、その東端のウィーンではオーストリア公が君臨するという構図を読み取ることもできるのである。

ウィーンはドナウ文化圏のなかで着実に地歩を固めつつあったが、当時のウィーンにはいまだ司教座が置かれておらず、パッサウ司教区の管轄下にあった。<sup>5)</sup> その他、パッサウからウィーンにかけてのドナウ河流域は、ことごとくこの司教区に属していた。こうした経緯や状況を踏まえてはじめて、オーストリア公レオポルト 6 世 (在位1198-1230) がウィーンに司教座を置こうとして奔走し空しい試みを繰り返したという事実もまた、十分に納得されるであろう。ウィーンに司教座が置かれたのは、ようやく15世紀半ば、1469年のことであった。<sup>6)</sup> 本論の目的は、1200年前後のドナウ河流域における文学事情を、当時のパッサウとウィーンの宮廷、さらにはアクイレリアの宮廷の文学的営為を通して明らかにすることにある。その際に看過されてならないのは、まずバーベンベルク家のウィーン宮廷の存在であり、しかもウィーン宮廷がパッサウ司教区と隣接するレーゲンスブルク司教区の司教座都市レーゲンスブルクと浅からぬ関係にあったことであり、さらにはアルプスの南にあってブリクセン司教区やザルツブルク司教区と隣接していたアクイレリア司教区の宮廷もまた、当時のパッサウ司教が総大司教として移り住んだがゆえに、本論のテーマの射程に入ってくることである。

## 2 司教座都市パッサウと『ニーベルンゲンの歌』

さて、13世紀初頭に誕生した英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied) を論じるときに、司教座都市パッサウを避けて通ることはできない。18世紀以来この叙事詩の成立場所をめぐる喧しい議論が沸き起こったが、少なくとも第2部に関するかぎり、パッサウ司教区および司教座都市パッサウが相当に重要な役割を演じていたであろうという点では、ほぼ意見の一致を見ている。<sup>7)</sup> すなわち司教座都市パッサウにあってパッサウ司教区を統べていた司教がこの作品の成立に深く関わっていたということである。たとえば『ニーベルンゲンの歌』第1部のライン河流域の描写が没个性的で典型的であるのに比べて、第2部で作者はパッサウからウィーンにかけてのドナウ河流域の地理にたいへん明るいことがまず挙げられよう。ブルゴント族のグンテル一行の歩みは、今日でもほぼ正確に辿ることができる。<sup>8)</sup> それだけでなく、パッサウでの司教ピルグリーン (Pilgrin) の応接やパッサウとウィーンのほぼ中間に

位置する辺境伯リュエデゲール (Rüedegêr) の居城ベッヒェラーレン (Bechelâren 今日のベヒラルン Pöchlarn) での父と子あるいは主人と賓客の歓会と別離は、いずれも今日の読者の心にも強く訴える場面である。作者が心血を注いで造形した人物リュエデゲールによって、第2部は第1部を受けて英雄叙事詩としての性格をベースにしながらも、その宮廷的・騎士的な陰影を深めている。この点が第1部と決定的に異なるところである。

パッサウ (テキストではパッソウヴェ Passouwe) という町の名前については、この作品で2度に亘って言及されている。最初はクリエムヒルトがフン族の王エッツェルのもとに嫁ぐ途中に立ち寄ったときであり (その①)、2度目はブルゴント王グンテルの一行がクリエムヒルトの招待を受けて、ウォルムスからドナウ河沿いにエッツェル王の宮廷に向かうときである (その②)。

その①

1295 Si zogeten dannen balde nider durch Peyer lant.

dô sagte man diu mære, dâ wæren für gerant  
vil unkunder geste, dâ noch ein klôster stât  
unt dâ daz In mit fluzze in die Tuonouwe gât.

1296 In der stat Pazzouwe saz ein bischof.

die herberge wurden lære unt ouch des fürsten hof.  
si îlten gegen den gesten ûf in Beyer lant,  
dâ der bischof Pilgrîn die schoenen Kriemhilden vant.

1298 Der bischof mit siner nifteln ze Pazzouwe reit.

dô daz den burgæren von der stat wart geseit,  
daz dar koeme Kriemhilt, des fürsten swester kint,  
diu wart wol empfangen von den koufliuten sint.<sup>9)</sup>

一行はほどなくバイエルンの国を通り下って行った。  
見知らぬ賓客たちが馬を進めて来た、  
と語り伝えられているが、そこには今もなお僧院が建っていて、  
そこではイン川が滔々とドナウ河に注ぎ込んでいる。

パッサウの町には一人の司教が坐していた。

町の家々にも国主の宮廷にも人影がなくなった。

人々は賓客たちを迎えようと、バイエルンの国へ急ぎ、  
この地で司教ピルグリーンは美しいクリエムヒルトを見た。

司教は彼の姪と連れ立ってパッサウへ馬を進めた。

国主の妹の娘であるクリエムヒルトが入来する、  
そのことがこの町の人々に知らされ、  
彼女はやがて商人たちに懇ろに迎えられた。

その②

1627 Wir kunnen niht bescheiden, wâ si sich leiten nider.  
alle di lantliute die gevrieschen sider  
daz ze hove fûeren der edeln Uoten kint.  
si wurden wol empfangen dâ ze Pazzouwe sint.

1628 Der edeln kûnege œheim, der bischof Pilgerîn,  
dem was vil wol ze muote, dô die neven sîn  
mit alsô vil recken kômen in daz lant.  
daz er in willec wære, daz wart in schiere bekant.

1629 Si wurden wol empfangen von vriunden ûf den wegen.  
dâ ze Pazzouwe man konde ir niht gelegen.  
si muosen über'z wazzer, dâ si funden velt.  
dâ wurden ûf gespannen beide hütten und gezelt.<sup>10)</sup>

彼らが何処に宿をとったのか、われわれは説明することができない。  
程なくすべての国人は伝え聞いた、  
気高いウオテの子たちが宮廷に向かっていることを。  
やがてパッサウの城下で一行は歓迎の出迎えを受けた。

高貴な生れの王たちの伯父である司教ピルグリーンは、  
彼の甥の面々がこのように多くの勇士を引き連れて  
入国したことを、ことのほか歎んだ。  
彼の好誼の心は逸早く一行に申し伝えられた。

一行は途中で縁者によって懇ろに迎えられた。  
パッサウの城下ではこれを款待する術がなかった。  
一行は河水を渡らねばならなかったが、そこには野原があった。  
そこでは仮小屋や天幕が設営されていた。

『ニーベルンゲンの歌』第2部はドナウ河（テキストではトゥオノウヴェ Tuonouwe）流域を舞台に展開されているものの、筋の展開から見るかぎり、パッサウの町は必ずしも重要な役割を担っているとは言えない。にもかかわらず、作者はわざわざ一行をこの町に立ち寄らせている。これはいったいどういうことか。そのためにわれわれはまず、歴史的な事実として、ここにパッサウ司教区を統べる司教座が置かれていたこと、そして司教を中心とした宮廷的な社交の世界が存在していたことを確認しておかなければならない。<sup>11)</sup>テキストには「国主の宮廷」（des fürsten hof 1296, 2）あるいは「国主の妹の娘」（des fürsten swester kint 1298, 3）なる用例が見られる。ここに所謂「国主」とは、テキストではパッサウ司教ピルグリーン以外に考えられない。しかも作品のなかでは、パッサウ司教がブルゴント王家の兄弟姉妹の母ウオテの兄にあたる、という設定になっている。（もっとも ze hove füeren「宮廷に向かう」[1627, 3]という表現の「宮廷」がエツツェル王の「宮廷」であることは、コンテキストから明らかである。因みに、これに似た ze hove riten「宮廷に馬を進める」なる表現も『ニーベルンゲンの歌』に散見される。[24, 1; 72, 3; 877, 2; 1731, 3; 1732, 1]）したがって、「宮廷」（hof）はけっしてウィーンの専売特許ではなく、パッサウにも司教を中心とする宮廷が存在したということが、テキストからも窺うことができる。<sup>12)</sup>われわれは「宮廷」という用語に世俗の王侯のみをその主宰者であると想定するかぎり、この文脈を正しく理解したことにはならない。

以上のことから推し測れば、作品の成立当時、作者が司教座都市パッサウおよびパッサウ司教を中心とする宮廷と深くかかわっていたこと、また一行にそのパッサウの町を素通りさせるのは忍びなく、10世紀に活躍した実在のパッサウ司教を思わせる人物を登場させて、彼をクリエムヒルトの伯父に仕立てて両者を会わせるという筋立てを挿入したと考えるのが妥当であろう。いみじくもパッサウ司教座資料館の館長ヘルベルト・W・ヴルスターは、『ニーベルンゲンの歌』の作者がこの地域をじつによく知っていたからこそ、また彼がその中心にいたからこそ、敢えてこの作品を司教座都市パッサウと関連づけたという見解を提示しているが、これは

卓見である。<sup>13)</sup>

パッサウの宮廷を語るとき、キューレンベルクの騎士(Der von Kurenberc)、ディエトマル・フォン・アイスト (Dietmar von Aist)、アルブレヒト・フォン・ヨハンスドルフ (Albrecht von Johansdorf) は忘れられない。最初の2人はパッサウ近くの出身とされているし、彼らの歌の基本形式は『ニーベルンゲンの歌』と同じ「長詩行」(Langzeile) である。また後者の歌人が最初に登場するのは、1180年パッサウ近郊の聖ニコライ教会に伝承されている書物の中である。続いて1201年および1204年には、パッサウ司教ヴォルフガー・フォン・エルラ (Wolfgang von Erla 在位1191-1204) の記録には「家士 (ミニステリアール) (Ministeriale) として記されている。彼の歌は全体で41ないし42節が伝承されており、最新版の『ミンネザングの春』 (Des Minnesangs Frühling) には13歌が採用されている。また、パッサウ司教ヴォルフガーの記録にも彼の名前が残されており、この事実はとりもなおさず、当時パッサウ司教ヴォルフガーを中心とした社交の世界で、歌人によって自らの歌が披露されていたことを傍証するものである。<sup>14)</sup> さらに、歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide) も一時期この司教の近くにいたであろうことは、つぎの有名な記録が実証している。すなわちパッサウ司教のウィーンへの旅の帳簿に1203年11月12日、「ツァイ [ゼルマウアー] にて、歌人フォーゲルヴァイデのヴァルターに毛皮外套を買うための代金として大シリング貨5枚」(Sequenti die apud zei [zemurum] walthero cantori de vogelweide pro pellicio V. sol. Longos) を与えたと記されている。<sup>15)</sup>

ところで『ニーベルンゲンの歌』の『哀歌』(Klage) の最終部分には、以下のような数行が見られる。

Von Pazowe der bischof Pilgerin

durh liebe der neven sin  
hiez scriben ditze maere,  
wie ez ergangen waere,  
in latinischen buochstaben.<sup>16)</sup>

パッサウの司教ピルゲリナーンが

彼の甥たちのために  
この物語を記録するよう命じた、  
当時それが慣習であったように、  
ラテン文字で。

この英雄叙事詩のもとになる物語をラテン文字で書き記すことを命じたのは、パッサウ司教ピルグリーン (Pilgrîn)、あるいはピルゲリーン (Pilgerîn) だと言われている。作中の「甥たち」とはグンテル、ゲールノート、ギーゼルヘルの3人である。『ニーベルンゲンの歌』では、先ほどの引用にあったように、この司教ピルグリーン (ピルゲリーン) がブルゴント族の王家に連なっていて、グンテル、ゲールノート、ギーゼルヘル、クリエムヒルトの母ウオテの兄、つまり彼らの伯父という系譜が前提になっている。もっとも時代はちょうど民族大移動の頃に設定されているから、それから数世紀のちに成立したこの作品との間に歴史的時間の上でずれがあるのは言うまでもない。では、このパッサウ司教ピルグリーン (ピルゲリーン) とはいかなる人物であったのか。実在の人物のなかでは、971年から991年まで、パッサウ司教を務めていたピルグリム Pilgrim (Piligrim と綴る) がよく似た名前として挙げられる。彼はオストマルクのドイツ人入植とハンガリー宣教に功績があったと伝えられているし、またザルツブルクから独立したオーストリア、モラヴィア、ハンガリーのために大司教座を置こうと画策し、失敗したとも伝えられている。こうした一連の行動から、司教ピルグリムはなかなかの政治家でもあったことが窺われる。<sup>17)</sup> すでに繰り返し言及されているが、『ニーベルンゲンの歌』第2部に登場するフン族の王エッツェルが実在のアッチラを想定していたとすると、ここにもまた歴史的な時間の上では齟齬が生じることになる。つまり彼は5世紀の民族大移動の頃にヨーロッパに侵攻したのだから、彼とピルグリーン (ピルゲリーン) との接点はない。『ニーベルンゲンの歌』第2部は、作者 (たち) がいくつかの伝承を時間的な前後関係を無視して採用し、それらを錯綜した状態のままにひとつの叙事詩に仕立てたのである。このように、物語 (Fiktion) と歴史 (Geschichte) とではその位相が異なることを百も承知の上で、当時の作者 (たち) はいくつかのエピソードの組み合わせの妙を競い合い、宮廷の聴衆の前でいかに巧みに、いかに斬新にこれらのエピソードを披露するかということに腐心していた。したがって、ときにはそのなかに史実に合致する箇所もあれば、まったく齟齬を来す箇所もあるのは、ごく当然のことと言えよう。

### 3 ウィーンの宮廷とオーストリア公

『ニーベルンゲンの歌』にウィーンの町が登場するのは、ブルゴント族の一行がトゥルンから入城し、エッツェル王とクリエムヒルトとの婚礼と祝宴のために滞在した数週間のみで、それ以前にも以後にもこの町について言及されることはない。しかも婚礼と祝宴は、当時の慣習に従って、昼が長く気候のよい聖霊降臨祭の頃に設定されている。

- 1361 Der künec ez nâch den êren die Hiunen schaffen bat.  
dô riten si von Tulne ze Wiene zuo der stat.  
dâ funden si gezieret vil maniger vrouwen lîp.  
si enpfiegen wol mit êren des künec Etzelen wîp.<sup>18)</sup>

国王はフン族の人々に、万事名誉を損ぜぬように計らえと命じた。  
そのとき一同はトゥルネからウィーンの都に馬を進めた。  
あまたの婦人方が晴着に身を飾っているのが見られた。  
彼らは名誉を落とすことなく国王エッツェルの妃を迎えた。

- 1365 Diu hôhzît was gevallen an einen pfinxtac,  
dâ der künec Etzel bi Kriemhilde lac  
in der stat ze Wiene. si wæn' sô manigen man  
bi ir êrsten manne nie ze dienste gewan.<sup>19)</sup>

この祝宴はちょうど聖霊降臨祭にあたっていて、  
そのとき、エッツェル王はクリエムヒルトと床を共にした、  
ウィーンの町で。最初の夫のもとではかくも多くの廷臣たちにかしずかれたことはなかった、と彼女は思った。

- 1375 An dem ahtzehenden morgen von Wiene si dô riten.  
dâ wart in ritterschefte schilde vil versniten  
von spern di dâ fuorten die recken an der hant.  
sus kom der künec Etzel unz in daz hiunische lant.<sup>20)</sup>

第18日目の朝に、一同はウィーンを出立した。  
その際、比武試合で多くの楯が、  
勇士たちが手に携えていた長槍で突き破られた。  
かくしてエッツェル王はフン族の国に帰り着いた。

筋の展開からすれば、パッサウ同様、ウィーンはとくに重要な役割を果たしているとは言えない。なぜ、作者はエッツェル王とクリエムヒルトの婚礼とそれに続く祝宴をエッツェルンブルク（オーフェン、現在のブダペストのブダ地区）ではなく、わざわざウィーンで挙げるように

設定しなければならなかったのか。従来の研究では、この点について必ずしも明確な説明が示されていなかった。作品成立当時なおパッサウの司教座がパッサウからウィーンに至るドナウ河流域を統括しており、バーベンベルク家のウィーン宮廷をも版図内に収めていた。さらに、この司教区は東方の異教世界ハンガリーにまでその影響力を及ぼす勢いであった。このことについても、H・W・ウルスターが当時のパッサウ司教の政治的・文化的政策と関連づけて論じている。すなわち、この司教区はバイエルンとオーストリアだけでなく、ハンガリーをも視野に入れた融和的な施策を行っていたのであり、そうした歴史的事情が何らかの形で『ニーベルンゲンの歌』第2部に影響を及ぼしていたのである。<sup>21)</sup> しかもここでは歴代のオーストリア公がパトロンとして進んで歌人たちを宮廷に迎えたのであった。したがってこの場合も、作者が当時のウィーン宮廷の文化的、文学的盛況を考慮し、敢えて異教徒とキリスト教徒との婚礼と祝宴の場としてウィーンの町を登場させたとは考えられないだろう。

このように『ニーベルンゲンの歌』にも登場するほどの町になっていたウィーンは、すでにローマ人の時代からウィンドボーナ (Vindobona) の名前で知られていた。しかしながらこの町の歴史は、ようやく1135年頃にバーベンベルク家がクロスターノイブルクからここに遷都したことをもって本格的に始まる。ウィーンは1137年に正式に法に基づく都市となり、続いて1156年にハインリヒ2世 (通称ヤゾミアゴット Jasomirgott) のもとでオーストリアは辺境伯領から公爵領に昇格し、彼が初代オーストリア公 (在位1156-1177) に就任する。しかし彼がまだ辺境伯 (在位1141-56) の頃、バイエルン公 (在位1143-56) でもあったので、バーベンベルク家の居城クロスターノイブルクよりは、むしろヴェルフェン家の宮廷であったレーゲンスブルクに頻繁に滞在したと言われている。ここで司教座都市レーゲンスブルクの宮廷と歌人たちについても少し触れておきたい。恋愛歌謡集『ミネザングの春』には、恋愛歌人ブルクグラーフ・フォン・レーゲンスブルク (Burggraf von Regensburg) およびブルクグラーフ・フォン・リエテンブルク (Burggraf von Rietenburg) の名前が見られる。ブルクグラーフは「城伯」と訳されているが、代々帝国采邑を拝領していた一族であった。この2人はときおり混同されることもあったが、いずれもレーゲンスブルクの宮廷に仕えていたと伝えられている。また2人は大ハンデルベルク写本に登場しており、『ミネザングの春』には、写本AおよびCに共通する歌、写本AないしはCのみの歌が数点採用されている。前者の作風は「鷹の歌」(Falkenlied) で知られるキューレンベルクの騎士に近く、ドナウ河流域特有の女性が男性と同等の立場で求愛する素朴な内容のものが多く、後者にはすでに南仏トゥルパドールの女性讚美の影響とカンツォーネ形式が認められる。<sup>22)</sup> いずれにしても、すでに早い時期にレーゲンスブルクの宮廷にはミネザングの伝統が根づいており、パッサウやウィーンとともにドナウ文化圏の一翼を担っていたことが窺われる。したがって、ハインリヒ2世の時代にはすでに、ウィーンとレーゲンスブルクの間には歌人たちの往来もあったであろうことが推察される。

パッサウが司教座都市であったのに比べて、ウィーンは比較的宗教色の薄い中世都市であった。上述の通り、とりわけハインリヒ2世がオーストリア公になって以来、彼のもとでウィーンは飛躍的な発展を遂げ、やがてドイツ語圏ではケルンに次ぐ人口を擁する都市に発展するに至ったのである。<sup>23)</sup> そのウィーンの宮廷では、ハインリヒ2世以後、歴代のオーストリア公（レオポルト5世、フリードリヒ1世、レオポルト6世）がラインマル（Reinmar von Hagenau ないし Reinmar der Alte）やヴァルター（Walther von der Vogelweide）をはじめ多くの優れた歌人たちを迎えて文芸を大いに奨励したことは、つとに知られている。もちろん歌人たちにとって、ウィーンの宮廷が必ずしも格別に居心地のいい宮廷であったわけではない。パトロンであるオーストリア公と歌人との間には一方的な依存関係、つまり主人に対する従者としての関係しか成立し得ず、たえず彼らは不如意を訴えていたし、極度の緊張を強いられてもいた。なるほどラインマルのような歌人には直接ウィーン宮廷に言及したり訴えたりした歌は皆無であるが、自主独立の気風の強いヴァルターのような歌人になると、宮廷とその主人に対する愛憎相半ばする心境が切々と歌われることになる。したがって当時の宮廷歌人の現実には、歌舞音曲を生業とする遊芸の民や遍歴の民のそれとあまり変わるものではなかった。すべては主人であるオーストリア公に懸かっていた。たとえば、ヴァルターの格言歌のなかでもとりわけ有名な L 20, 31では、そうした主人と歌人との関係が赤裸々に歌われている。今なおその解釈が定まっていないとはいえ、この歌が1198年頃のヴァルターのウィーン別離を背景に誕生したものであり、ここに登場するオーストリア公がレオポルト6世であったという点では、ほぼ大方の見解は一致している。<sup>24)</sup> オーストリア公とヴァルターとの確執について論者はすでに他の箇所でも言及しているが、<sup>25)</sup> ウィーンの市門から締め出された歌人が、最終行でなおも「この歌によって殿がわたしを覚えて下さるように」（hie bî si er an mich gemant）<sup>26)</sup> と願わざるを得なかったということは、その当時の歌人たちが置かれていた厳しい状況を如実に物語っている。このように彼は、歌という強力な武器によってオーストリア公に執拗に迫っている。当時の王侯貴族の最大の徳目は、あらゆる機会を通じてできるだけ多くの人々にできるだけ多くの施しを与えることであった。「気前のよさ」（milte）という点で、レオポルト6世がヴァルターにとってつねに徳操高い主人であったかどうかは定かでないが、この歌に関するかぎり、彼のみが宮廷から締め出されているために（「わたしの左右に雨が降るのに／その一滴もわたしには当たりません[ez regent bédenthalben mîn/ daz mir des alles niht enwirt ein tropfe.]」<sup>27)</sup>）、彼は最終行でオーストリア公をほめたたえ、喫緊の目標であった宮廷への回帰を願わざるを得なかったのである。

それにしても、ウィーンの宮廷が当時としては歌人たちにとって魅力ある宮廷であったことについては、遺された歌謡等のテキストから窺い知れる。しかもこのことは、半ば定式化され増幅された表現を伴って語られることになる。たとえば、13世紀前半にバイエルンやオースト

リアで活躍したデア・シュトリッカー (Der Stricker) は、かつてあらゆる歌人たちがオーストリアにやって来たのは、「そこでは語り、歌い、楽器を奏することが称揚され、褒賞も多かったからだ」<sup>28)</sup> と語っているし、13世紀後半に活躍したウィーン市民で年代記作家であったヤンセン・エニケル (Jansen Enikel) は、オーストリア公レオポルト 6 世がウィーンの教会の合唱隊席で歌ったと主張している。<sup>29)</sup> 彼らの言説が歴史上の事実を忠実に再現しているかどうかはともかくとして、そうしたことがテキストに記されたこと自体、すでにウィーン宮廷が詩歌や管弦を奨励し、またその主宰者であるオーストリア公がパトロンとしてこの世界に積極的に関わったことを間接的に裏付けている。

#### 4 アクイレイアの宮廷

ヴァルターと司教座都市パッサウとの関係ということになると、この町とも交渉のあった北イタリアの総大司教座都市アクイレイアのことも視野に入れなければならない。たしかにアクイレイアはドナウ文化圏から遠く離れてはいるが、ドナウ河流域との人的・物的交流は継続的になされていた。ちょうどヴェネチアとトリエステの間に位置する古都アクイレイアはかつて古代ローマの最前線として栄えた町であるが、今日ではその栄華は見る影もなく、最近になってようやく世界遺産としてその存在が認知されたばかりである。しかし中世には先に示した地図のさらに南に位置し、パッサウ、ザルツブルク、ブリクセンの各司教区と境を接するアクイレイア司教区の中心地であった。果たしてこの地がドナウ文化圏に属するかどうか、またヴァルターがこの町にも足を踏み入れたかどうかはともかくとして、ヴォルフガーがパッサウでの司教職を辞し、北イタリアのアクイレイア総大司教を務めたことを考慮すれば、アクイレイアの宮廷についても言及しておく必要があるだろう。<sup>30)</sup>

ヴァルターが格言歌 L 34, 34において「優れた、非の打ちどころのない総大司教」(der biderbe patriarke missewende frî)<sup>31)</sup> と称揚したのは、かつてのパッサウ司教ヴォルフガーその人であった。彼は請われてアクイレイア総大司教(在位1204-1218)として赴任することになるが、これはパッサウでの13年間の職務が評価されたことであった。ヴァルターの歌の多くがそうであるように、この歌がいつの頃に作られたのかは不詳である。ただ歌の「調」(Ton)から判断する限り、またヴォルフガーのアクイレイア赴任の年、すなわち1204年以降の作であるということになる。ヴォルフガーがパッサウからウィーンへの往復の旅を企てたときに、一時期ヴァルターが同行したことはすでに述べた通りである。しかし、彼がこの司教の近くにいたのが1198年以降のいつ頃のことであったのかを知る手がかりはない。また、その後この歌人がどこに身を寄せたのか、どのような生涯を送ったのかについても定かではない。しかし彼が称揚したアクイレイアの総大司教の宮廷では、パッサウとは異なり、親教皇派の保守的な雰囲気

気が支配しており、ヴァルターの歌の類は厳しい批判に曝されざるを得なかった。そのことを示す事例が、トーマジーン・フォン・ツィルクラリアの『イタリアの客人』(Der welsche Gast)である。彼は1187年から88年頃に北イタリアのフリウリ地方に生まれ、アクイレイアの宮廷では聖職者としてヴォルフガーに仕えていた。この人はイタリア人でありながら、外国語としての中世ドイツ語を習得し、その言語を駆使してアクイレイアの宮廷生活、とりわけ若い人々への教訓書を著した。この時代には聖と俗の両世界が今日では想像も及ばないほど広範囲に亘って相互に交流していた。つまり僧籍にある人間が貴族の子弟に教訓を垂れる書を編んでいたのである。この作品は1215年の冬に書き始められ、翌年の5月末までに一気呵成にまとめられたと推定されている。<sup>32)</sup> そのなかに、「あの良き僕は教皇に対して／何と不当な行為をしてかしたことでしょう。／彼は自らの慢心ゆえに言いました、／教皇がドイツの財で／ローマの献金箱を満たそうとしていると。／彼がわたしの忠告を聴いていたら、／こんな言葉を口にしなかったのに。／このために彼は自らの優れた言も／台無しにしてしまい、／彼の言はますます注目されなくなります」<sup>33)</sup> と語られている箇所がある。ここで彼が容赦なく非難している相手は、他ならぬヴァルターその人であった。どちらかと言えば保守的な宮廷人ツィルクラリアにしてみれば、ヴァルターの齒に衣着せぬ教皇批判はやり切れなかったと見えて、彼はヴァルターと同じ激しい口調で相手をやりこめている。しかし言葉の力に関する限り、彼の教訓書に見られるドイツ語表現はヴァルターのそれに遠く及ばない。ツィルクラリアの怒りを買ったのは、次のような内容の歌であった。

Ahî wie kristenheit nu der babest lachet,  
 swenne er sînen Walhen seit ich hanz also gemachet !  
 daz er dâ seit, des solt er niemer hân gedaht.  
 er giht ich hân zwên Allaman undr eine krône braht,  
 daz siz rîche sulen stœren unde wasten.  
 ie dar under fûllen wir die kasten:  
 ich hâns an mînen stoc gement, ir guot ist allez mîn:  
 Ir tiuschez silber vert in mînen welschen schrîn.  
 ir pfaffen, ezzent hûenr und trinkent wîn,  
 unde lânt die tiutschen leien magern unde vasten.(34,4) <sup>34)</sup>

ああ、キリスト教徒を教皇はいまどんなに笑っていることでしょう。  
 彼が彼の郎党ヴェルフェン陣営に「わたしはこんな風にしたのだ」と語るとき、  
 自分の語っていることを、彼は一度も考えたことがなかったのです。

彼曰く、「彼らがこの国を混乱させ荒廃させるようにと、  
2人のドイツ王を1つの王冠のもとに置いた。  
そしてその間にわたしらは献金箱をいっぱいにして。  
わたしは彼らに献金箱を思い起こさせよう、彼らの財産はすべてわたしのものだ。  
汝らドイツの銀貨よ、わたしの箱に入るがよい。  
汝ら僧侶たちよ、鶏肉を食べ、葡萄酒を飲め。  
そしてドイツの平信徒を痩せ細らせ、空腹にせよ」と。

この歌がいつどこで歌われたのか、確定する術はないが、ヴァルターがシュタウフェン家のフィリップ王のもとに身を寄せ、反教皇キャンペーンを行っていた時期であろうと推察されている。何の支えもないこの歌人の背後にフィリップ王のようなパトロンがついていたからこそ、かくも大胆な言辭を吐くことができたのではないか。それがおそらくもっとも無理のない解釈であると考えられる。<sup>35)</sup>そしてこの歌がトーマジーンによって攻撃されていることから、成立年は1215年以前ということになる。それにしても、ヴォルフガーという卓越した人物によって歌人として認められたヴァルターではあったが、こともあろうに北イタリアのヴォルフガーの赴任先で、彼の歌が組上にのせられたというのは、まことに皮肉なことである。しかしながら、彼の歌がドナウ河流域からアルプスを越えて北部イタリアにまで届いていたという事実は、われわれを驚かせるだけでなく、彼の歌がもつ衝撃の強さを示すものでもある。ことほどさように、この時代の文学上の交渉一般が想像以上に豊穡であり、かつその影響の及ぶ範囲が想像以上に広範であったことを物語ってはいないだろうか。

## 5 おわりに

以上、パッサウとウィーンの宮廷を中心に1200年前後のドナウ河流域における文学事情を、当時の文学テキストを手がかりに明らかにしてきた。いま一度、ここでその内容を敷衍しておこう。

まず、フリッツ・ペーター・クナップの文学史記述から出発し、続いてパッサウ司教区と司教座都市パッサウと『ニーベルンゲンの歌』の成立をめぐる問題に接近した。ここではパッサウ司教が作品成立に深く関わっていたことを指摘し、その証として作品の中に実在の司教を想起させる形で導入した作者の意図を探った。また hof という中高ドイツ語が世俗の王侯を中心にした宮廷だけでなく、司教を中心とした宮廷をも意味し、司教がパトロンとして文芸・遊芸を奨励していた事実と迫った。続いて、同じく『ニーベルンゲンの歌』においてフン族のエッツェル王とブルゴント王家の娘クリエムヒルトとの結婚の儀式と祝宴がウィーンで執り行われ

たことに注目し、作者がウィーン宮廷を無視できなかったという事実から、当時ウィーン宮廷の存在がいかに重要であったかに言及し、ドナウ河の西と東で性格の異なる宮廷が競合しながら、一方では第一級の「英雄叙事詩」の編纂作業がなされ、他方では「恋愛歌謡」（ミンネザング）の伝統が生み出されてきたことを論じた。その中心人物であるヴァルターが両都市を股にかけて活躍し、オーストリア公だけでなくパッサウ司教のもとでも歌人として奉仕したことの意味を探った。そして最後に宗教的・政治的な枠組をはみ出して、ドナウ河流域のはるか南、北イタリアのアクイレイアの宮廷に、かつてのパッサウ司教で、のちにアクイレイアの総大司教を務めたヴォルフガー・フォン・エルラなる人物を登場させ、この宮廷における文学活動の具体例としてヴァルターの歌謡とその受容を紹介した。

ドナウ河流域、とくにパッサウ司教区では、すでにハプスブルク家が興る以前に、きわめて活発な文学活動が認められたことに関しては、文学史上いくら評価しても過ぎることはない。その意味でも、クナップが提示した司教区による記述ははなはだ魅力的であり、かつ刺激的である。しかし、この文学現象をオーストリア文学史のなかで正しく位置づけるには、すなわちバーベンベルク家ののちにこの地域を支配することになるハプスブルク家の時代にこの現象がどのように継承されたのか、またオーストリア意識なるものの成立過程でどのような展開を遂げたのかを明らかにするには、さらなる検証と記述が求められるであろう。

## 注

- 1) Geschichte der Literatur in Österreich. 7 Bde. Hrsg. von Herbert Zeman. Bd. 1, Fritz Peter Knapp: Die Literatur des Früh- und Hochmittelalters in den Bestümern Passau, Salzburg, Brixen und Trient von den Anfängen bis zum Jahre 1273. Graz 1994. なお、論者による本書の紹介は、阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第37巻（1995）、125-128頁に掲載されている。
- 2) Vgl. Fritz Peter Knapp: Gibt es eine österreichische Literatur des Mittelalters. In: Die Österreichische Literatur. Ihr Profil von den Anfängen im Mittelalter bis ins 18. Jahrhundert (1050-1750). Hrsg. von Herbert Zeman. Teil 1. Graz 1986, S. 49-85; derselbe: Literatur und Publikum im österreichischen Hochmittelalter. In: Die Österreichische Literatur. Ihr Profil von den Anfängen im Mittelalter bis ins 18. Jahrhundert (1050-1750). Hrsg. von Herbert Zeman. Teil 1. Graz 1986, S. 87-117.
- 3) Vgl. Knapp, Die Literatur des Früh- und Hochmittelalters, S. 9-11.
- 4) Knapp, Die Literatur des Früh- und Hochmittelalters. Nachsatz.
- 5) Vgl. Karl Lechner: Die Babenberger. Markgrafen und Herzöge von Österreich. 976-1246. Wien <sup>5</sup>1994, S. 143ff.; Kunitaka Matsumura: Sangsprüche um den Wiener Hof. Walthers Auseinandersetzung mit *hoeveschem* und *unhoeveschem* Verhalten. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd.1(2002), S. 180.

- 6) Vgl. Lechner, a.a.O., S. 200ff.
- 7) Vgl. Herbert W. Wurster: Das *Nibelungenlied* und das Bistum Passau unter Bischof Wolfger von Erla (1191-1204). In: Festschrift für Prof. Dr. Andreas Kraus zum 75. Geburtstag am 5. 3. 1997, S. 356ff. この論文でヴルスターは『ニーベルンゲンの歌』の成立場所としてウォルムスという仮説も紹介しているが、その可能性はきわめて低いとしている。
- 8) Vgl. Wurster, a.a.O., S. 328-345.
- 9) Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch. Hrsg. von Helmut de Boor. Wiesbaden 1967, S. 209f.
- 10) Das Nibelungenlied, a.a.O., S. 258.
- 11) Vgl. Das Bistum Passau und seine Geschichte. Bd. 2: Das Bistum im hohen u. späten Mittelalter. Hrsg. von Herbert W. Wurster. Strasbourg 1996, S. 18-24; Wurster, a.a.O., S. 319-323.
- 12) Vgl. Wurster, a.a.O., S. 339. ヴォルフガーから3代あとのウルリッヒ (1215-1221) がパッサウ司教であった1217年に、じっさい神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世から「帝国領主」(Reichsfürst)の称号が与えられている。Vgl. August Leidl: Die Bischöfe von Passau 739-1968 in Kurzbiographien. Passau 1978.
- 13) Vgl. Wurster, a.a.O., S. 339.
- 14) Vgl. Wolfger von Erla. Bischof von Passau (1191-1204) und Patriarch von Aquileia (1204-1218) als Kirchenfürst und Literaturmäzen. Hrsg. von Egon Boshof und Fritz Peter Knapp. Heidelberg 1994, S. 345-364.
- 15) Vgl. Hedwig Heger: Das Lebenszeugnis Walthers von der Vogelweide. Die Reiserechnungen des Passauer Bischofs Wolfger von Erla. Wien 1970. 288 S.
- 16) Das Nibelungenlied und Die Klage. Handschrift B (Cod. Sangall. 857). Köln/Graz 1962, S. 162; Der Nibelunge Noth und Die Klage. Hrsg. von Karl Lachmann. Berlin 1960, S. 369.
- 17) Vgl. Leidl, a.a.O., S. 54.
- 18) Das Nibelungenlied, a.a.O., S. 219.
- 19) Ebenda.
- 20) Das Nibelungenlied, a.a.O., S. 221.
- 21) Vgl. Lechner, a.a.O., S. 201f.; Wurster, a.a.O., S. 344f. und 358ff.
- 22) Vgl. Codex Manesse. Text Bilder Sachen. Katalog zur Ausstellung der Universität Heidelberg. Hrsg. von Elmar Mittler und Winfried Werner. Heidelberg 1988, S. 246-249 u. S. 551-556. 因みに、1985年にブダペストのセーチュェーニィ・ハンガリー国立図書館のヴィズケレティ教授によって未完の歌謡写本の一部が発見され、現在同図書館に保管されているが、この写本にはキューレンベルクの騎士の歌とともにブルクグラフ・フォン・レーゲンスブルクの歌が収められている。なお、論者は「ブダペスト・フラグメントに見る『鷹の歌』について」(大阪市立大学文学部紀要『人文研究』第47巻、第10分冊、23-37頁)で現地における実地調査を報告しているので、参照されたい。

- 23) Vgl. Wurster, a.a.O., S. 358f.
- 24) Vgl. Karl Kurt Klein: Walthers Scheiden aus Österreich (20, 31; 35, 17; 24, 33). In: ZfdA 86 (1955/56), S. 215-230; Siegfried Beyschlag: Walther von der Vogelweide und die Pfalz der Babenberger (Walthers Scheiden aus Wien). In: Jahrbuch für fränkische Landesforschung 19 (1959), S. 377-388; Günther Schweikle: Walther und Wien. Überlegungen und Biographie. In: Walther von der Vogelweide. Beiträge zu Leben und Werk. Hrsg. von Hans-Dieter Mück. Stuttgart 1989, S. 75-87; Werner Hoffmann: Walthers Weggang aus Wien und der Beginn seiner politischen Lyrik. In: Expedition nach der Wahrheit. Poems, Essays, and Papers in Honour of Theo Stemmler. Festschrift zum 60. Geburtstag von Theo Stemmler. Hrsg. von Stefan Horlacher und Marion Islinger. Heidelberg 1996. S. 93-108.
- 25) 拙著『オーストリア中世歌謡の伝統と革新—ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデを中心に—』東京（水声社）、1995年、125頁以下参照。
- 26) Walther von der Vogelweide: Leich Lieder Sangsprüche. 14., völlig neubearbeitete Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns. Hrsg. von Christoph Cormeau. Berlin 1996, S. 41.
- 27) Ebenda.
- 28) Der Stricker: Die Kleindichtungen. 5 Bde. Hrsg. von Wolfgang Wilfried Moelleken. Göppingen 1973-78, Bd. 1, S. 153.
- 29) Vgl. Jansen Enikel: Fürstenbuch. Hrsg. von Philipp Strauch. Hannover 1891-1900, S. 2027f.
- 30) Vgl. Heger, a.a.O., S. 19-57.
- 31) Walther, a.a.O., S. 67.
- 32) Vgl. Österreichische Geschichte 1122-1278. Die Länder und das Reich. Die Ostalpenraum im Hochmittelalter. Hrsg. von Heinz Dopsch, Karl Brunner und Maximilian Weltin. Wien 1999, S. 108.
- 33) Thomasin von Zirclaria: Der wälsche Gast. Hrsg. von Heinrich Rückert. Quidlinburg 1852. Nachdruck mit einer Einleitung und einem Register von Friedrich Neumann. Berlin 1965, S. 304f.: Nu wie hât sich der guote kneht/ an im gehandelt âne reht,/ der dâ sprach durch sinn hôhen muot/ daz der bâbest wolt mit tiuschem guot/ vûllen sîn welhischez schrîn!/ hiet er gehabt den rât mîn,/ er hiet daz wort gesprochen niht/ dâ mit er hât gemacht enwiht/ manige sîne rede guot,/ daz man ir minner war tuot. (11191-11200)
- 34) Walther, a.a.O., S. 64.
- 35) 『オーストリア中世歌謡の伝統と革新』、199-204頁参照。

(まつむら・くにたか 国際言語学部教授)